

ー群馬県ー

災害に学ぶ、土木の道

1. はじめに

群馬県庁の土木技師として働き始め、気付けば7年目になった。女性が少ないとされる土木の分野に私が進んだのは、「偶然が重なり合った結果」だと感じている。本稿では、私が土木と出会うきっかけとなった出来事や東日本大震災に伴う被災地支援業務の経験について感じたことなどを紹介する。

2. 災害と防災と土木

私が進路を考える時期には、決まって大きな災害があった。高校生の時に隣県で発生した新潟中越地震は、「土木」という分野で防災を学べると知るきっかけになった。人々の命を守るために、尽力する多くの研究者がいることを知り、自分も関わってみたいと考えるようになった。

そして大学生の時に発生した東日本大震災では、研究の一環として実際に被災地に足を運び、現地調査を行った。目の前に広がる光景に、これほどまでに自然の脅威を感じたことはなく、改めて自然を相手にする重大さを感じた。この大学での研究では、官公庁の方々ややりとりをする機会があった。私はこの経験を通して、地元群馬県のために仕事をしたいと考えるようになり、群馬県庁へ入庁することとなった。

3. 宮城県での支援業務について

入庁4年目、大震災から7年目には、東北派遣の話をもらい、土木の道に進む決断をした頃の思いを再認識した。微力でも未曾有の災害に関わることができればと思い1年間の派遣を決めた。派遣された



防潮堤復旧工事の完成時の様子（平成29年度撮影）

土木事務所の河川部には、9県から15人もの自治法派遣職員が在籍し、災害復旧工事に携わっていた。初めて経験する大規模工事、さらには群馬県で経験することができない海岸工事にも関わらせていただいた。特に離島の防潮堤復旧工事では、汽船に揺られ現場に向かい、潮の満ち引きや海産物の状況に左右される工程に苦戦しながらも、復興のために尽力される受注業者や周りの職員にも助言をもらいながら、自分なりの復興支援ができたと思っている。

休日は、派遣仲間と東北の観光地へ出かけたり、ボランティアに参加しながら地元の方々と触れあったり、貴重な体験を通して、東北の魅力をたくさん知ることができた。

現在も派遣仲間との交流は続いている。昨年度は、皆で全建講習会にも参加し、最新技術を学ぶとともに、久々の再会で近況報告や思い出話に花を咲かせた。今後も、意見交換をするなど、当時の縁が続いていくとうれしいと思っている。



派遣職員との交流の様子（平成29年度撮影）

4. おわりに

私は東北派遣の経験を通して、公共土木施設が担っている役割を再認識した。また地元の方々とのふれあいを通して、以前にも増して「社会をよりよくしたい」「人の命を守りたい」と考えるようになった。

近年は毎年のように、各地で災害が発生しており、防災・減災の重要性が叫ばれている。私が学生の時に感じたように、防災分野に想いを持つ技術者が増えてほしいと願いながら、今後も「縁」を大切に業務に励んでいきたいと思う。

群馬県 県土整備部 河川課 田畑 あすみ